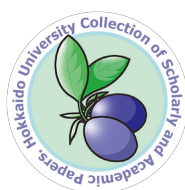




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	20年前の「杉山のメモ」の意外な内容
Author(s)	三上, 直之
Citation	科学技術コミュニケーション, 37, 73-75
Issue Date	2025-08
DOI	https://doi.org/10.14943/114629
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95907
Type	departmental bulletin paper
File Information	JJSC_37_08_mikami.pdf



20 年前の「杉山のメモ」の意外な内容

三上 直之¹

The Unexpected Content of “Sugiyama’s Note” from 20 Years Ago

MIKAMI Naoyuki¹

キーワード：杉山滋郎，科学技術コミュニケーション，旗，囲い

Keywords: Sugiyama Shigeo, science communication, flag, boundary

CoSTEP 初代代表の杉山滋郎さんたちが科学技術振興調整費に応募していた「科学技術コミュニケーション養成ユニット」の採択が内定したのは2005年4月28日。その直後の5月4日，杉山さんをはじめとする関係者数人が北海道大学理学部の演習室に集まり，開設に向けた準備のための会合が開かれた。CoSTEP という略称もまだ決まっていない頃である。スタッフ候補だった私は，先にスタッフに内定していた難波美帆さんと共にこの会合に出席した。そのことはCoSTEP 設立10年を機に杉山さんが書いた手記でも触れられている（杉山 2014, 112）。私は当時，東京で大学院博士課程の5年目を過ごしていて，会合のため札幌まで足を運んだことはよく覚えている。

話の中身の記憶はほとんどないが，最近，研究室の書棚を整理したら当時の資料が出てきた。その中に「杉山のメモ（2005年5月4日）」という題名がついたA4判1ページのプリントがあった。おそらく会合では，杉山さんがこのメモを示しながら当面の方針を話したのだろう。5つほどの要点がパソコンの文字で箇条書きされた簡易なレジュメであるが，その内容は今読むと極めて意外なものだった。

冒頭に「1. <養成する人材>を明確に」とある。科学コミュニケーション活動の「実施部隊」「前衛部隊」として修了生を「送り込む場所」が必要だとして，例として大学や研究所の広報室が挙げられている。その脇には，修了しても一般の会社員になってしまうようではいけないという趣旨の，杉山さんの発言を書き留めた書き込みもある。別の項目としては，「4. 発足時のイベントを大々的に「有名人」が必要」とか，「5. 機会を捉えては宣伝を」なども挙がっていた¹⁾。一方で，地域に根ざした，双方向的で参加型の科学技術コミュニケーション活動とか，実践を通じた学び，幅広い場で活躍する役割としてのコミュニケーションといった，その後，CoSTEP のモットーとなる要素に触れた記述は全くない。派手な宣伝をしようという方針はありながらも，比較的狭い領域で科学技術コミュニケーションの存在を確立しようとするニュアンスが強い内容だった。

手元のファイルには，この4カ月後の9月3日，10月の開講を前にした受講説明会での杉山さんのあいさつを書き留めたメモも綴じられていた。そこには，社会人にも広く門戸を開き，科学ジャーナリストや科学館のスタッフだけでない，多様な職業の人たちを科学技術コミュニケーションとして

2025年6月30日受納 2025年7月1日受理
所 属：1. 名古屋大学大学院環境学研究科
連絡先：mikami.naoyuki.w2@f.mail.nagoya-u.ac.jp



図1 CoSTEP 時代の筆者

養成するとか、市民参加型の双方向的なコミュニケーション、地域に根ざした科学技術コミュニケーションを行うとか、サイエンスカフェなどの実践を通じて学ぶといった、私自身にもなじみ深い CoSTEP の旗印が語られていた。

これらは、杉山さんたちが振興調整費への応募時に強調していたポイントでもあったことは、同じファイルに残っていた提案書のコピーから確認できた。その意味でも、5月の「杉山のメモ」の守りの姿勢が際立っている。どういう意図があったのか、気になるので、杉山さんに連絡して話を聞かせてもらった²⁾。

すると、開口一番、「このメモは全く記憶にない。このようなことを書いていたのは新鮮な驚きだ」という答えが返ってきた。杉山さんとしては当初から、「科学技術コミュニケーションとはどういう人材であるべきかを抽象的に議論しても仕方がない。社会的に重要な問題を取り上げて、社会に対して科学技術コミュニケーションの存在が見える活動をしたい」と考えていたという。

しかし、それに続けて、この意外なメモを解釈する一つの手がかりとして、当時の事情を次のように解説してくれた。曰く、5月の会合の時点では、どんな人材を集めればそれが可能になるかを模索している最中で、予算獲得の過程で審査関係者や大学執行部などから受けたコメントの影響が、まだ大きかった。やがてスタッフの採用が進み、受講生も、大学院生だけでなく学外の社会人を積極的に受け入れることで、多彩な人材が集まり、社会的なテーマを取り上げたコミュニケーション活動を展開できる可能性が、徐々に見えてきた。2005年10月に開講を迎える頃には、スタッフの陣容や、実際に集まりそうな受講生に合わせて、実社会の問題を取り上げた、地域に根ざした科学技術コミュニケーション活動、実践を通じた学びという路線でやれそうだ、やっていくしかないという感触が強まってきたのではないかと……今から振り返っての想像も含めた話だけれど、と断りつつ、杉山さんは話してくれた。

CoSTEP が始まった頃、「科学技術コミュニケーション」という言葉には、今ほど明確な輪郭はなく、その曖昧さがむしろ力となり、多様な背景を持つ人たちが集まってきた面があった。科学技術コミュニケーションは、その下に多様な人たちが集まれる「旗」のようなものであり、当時はその色彩が特に強かった。30代前半の約3年間、CoSTEP のスタッフだった私も、この旗のもとで数々の刺激的な経験をさせてもらった一人である。

20年の歳月を経て、多岐にわたる実践や教育、研究が積み重ねられ、科学技術コミュニケーションが、旗よりもむしろ「囲い」の意味合いを帯びる場面も増したのではないと思う。これは分野の成熟に伴う必然的な変化でもあり、一概に否定する必要はない。杉山さんのメモをきっかけに原点を振り返って気づかされるのは、CoSTEP をめぐって、旗と囲いが拮抗する関係が当初から存在

したことである。囲いの存在を意識しつつも、その中に閉じこもらず、社会に対して扉を大きく開き、旗を高く掲げ、そこに集った人たちと何ができるかを共に考え、実践する。CoSTEP が、そうした協働と創造の場であり続けることを願っている。

注

- 1) メモに掲げられた5項目のうち残りの2項目は、eラーニングの進め方と、開講時期や授業を行う曜日に関することであった。
- 2) 杉山滋郎さんへのインタビューは2025年6月27日にオンラインで行った。

文献

杉山滋郎 2014:「CoSTEP 私史」「CoSTEP 10 周年のつどい」実行委員会編『記念誌 CoSTEP10 周年のつどい』北海道大学 CoSTEP.